

関西学院大学 研究成果報告

2025年 9月 29日

関西学院 院長殿

所属： 教育学部
職名： 教授
氏名： 宮原一成

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☐ 関西学院留学 長期（滞在国： ） ☒ 関西学院留学 短期（滞在国： 英国 ） ☐ 宣教師研究期間 ☐ 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	現代英語文学作品における現在時制語り用法の研究の総括に向けて
研究実施場所	英国ヨーク大学 （他に英国ヘイ・オン・ワイ、英国エジンバラ、アイルランド・ダブリン）
研究期間	2025年5月8日 ～ 2025年9月12日（4ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

英国ヨーク大学（The University of York）の英文学科（Department of English and Related Literature）に、5月9日から9月10日までの期間アカデミック・ビジターの資格で滞在し、同大学図書館の英文学・文体論および関連分野の充実した文献資料を利用して資料収集と整理を行った。アカデミック・ビジター資格応募時に受け入れに向け尽力して下さった同学科のリチャード・ウォルシュ教授は、ヨーク大学を拠点とする「物語論学際研究センター」（Interdisciplinary Centre for Narrative Studies）や「英国アイルランド物語論研究協会」（the British and Irish Association for Narrative Studies）の主宰者であり、留学開始前にはそれらのイベントにも参加できる予定だったが、実際には夏休み期間中ということで特段の催しは開かれなかった。そのため個人での研究活動に集中することにし、同図書館およびアカデミック・ビジター専用オフィスで資料を収集しては読破し、順次整理を行った。

この大学図書館では蔵書のかなりの部分が紙から電子媒体に移行していたが、それでも各種学術雑誌の最新号も含む閲覧可能資料が非常に充実しており、大変ありがたかった。メインの研究対象である語りの時制に関する文献のみならず、作品研究のための参考になる心理学、言語学、哲学、美術史系の文献についても即時に現物を参照できる環境があり、大いに助けられた。

また滞在中には、アイルランドのダブリンで毎年開催されるジェイムズ・ジョイスに

関するブルームズ・デイ記念行事と、2つのブック・フェスティバル（ヘイ・オン・ワイ・ブック・フェスティバルおよびエジンバラ国際ブック・フェスティバル）にも参加。取材を行った。前者のダブリン訪問では、あわせてアイルランド人作家ポール・リンチの小説『預言の歌』の舞台となる地域を訪れ、その地理的背景を確認した。また後者のブック・フェスティバルでは、現代同時代人作家たち本人が作品を解説するのを直接聴取することができ、大いに研究の参考になった。なかでも、最新作 *Gliff* を現在時制で書き、その続編もやはり現在時制語りをを用いる予定だというアリ・スミスと、代表作 *The Curious Incident of the Dog in the Night-time* を現在時制語りで綴ったマーク・ハッドンが、それぞれ自分の言葉で作品制作の意図を語るのを聞いたのは、今後の研究の展望に裨益するところ大であった。

研究期間の後半にはヨーク大学キャンパス内で論文を執筆することに時間を充て、日本で書きかけていたものも含め、合計4本の論文をほぼ完成させることができた。帰国後に手直しを加えた上で、論文あるいは口頭発表の形で順次公刊していく予定である。

以下、それらの論文の内容を順不同に記す。なお、ここでは研究の内容を示すにとどめ、正式な題名は推敲の後でつける予定であることをお断りしておく。

①「Claire Keeganの *Small Things like These* における借りと正義と暴力」（日本語論文）

アイルランド人小説家クレア・キーガンが2021年に発表した小説を、文化人類学の概念である《贈与交換》を糸口にして読み解く論考である。

なお報告者は過去に《贈与交換》を鍵にして語りの時制の使い分け（現在時制か過去時制か）を解釈する論考を発表しており、今回の論文はその論考に対する傍証のような位置づけにもなっている。

②“The “Traumatized” Historical Present Tense in Yvonne Owuor’s “Weight of Whispers” （英語論文）

ケニア人作家イヴォンヌ・オウアーの初期の傑作である短編小説(2003年発表)が、現在時制語りを基調にして書かれていることの効果や意義を論じた英語論文である。現在時制語りに過去時制や過去完了形を交える際、出来事の前後関係にあえて誤解を生じさせる効果を狙うことで、話者が精神的トラウマを患っていることを表現するという作者の戦略を解説した。

③“Narrative Tenses and the Buberian Concept of “I-Thou” Dialogue: Jim Crace’s *The Melody* as a Case Study” （英語論文）

英語小説における現代時制語り及び現在時制と過去時制を作品の中で使い分ける語り手法について、20世紀オーストリアの宗教哲学者マルチン・ブーバーの対話の哲学の観点から説明する試みである。この論文の後段は、英国人作家ジム・クレイスの2018年の小説を実例素材として考察するという内容である。

④「ディストピア小説 *Prophet Song* における預言性と視線の行方」（日本語論文）

アイルランド人作家ポール・リンチが現在時制を基調にして書いたディストピア小説(2023年)を、モチーフの使用と独特な文体利用の観点から詳細に検討・評価する論考である。監視をごく自然に象徴する目のモチーフを、独自に喪失の意味を付与した靴モチーフに組み合わせるという斬新な企てに注目し、さらに作者が、感情表現を動詞ではなくあえて指示詞を付けた名詞句の形で表現していることを指摘した上で、これら2つのなかなか認識しづらい創意が作品に「預言」の性格を与えていると主張する論考。

なお②と③は現在時制語り用法研究を総括する研究に直結する内容を持っており、おのおの、研究を将来的に本という形にまとめる際には、序論の一部として配置することができるようなものにすることができた。

以上のように、4ヶ月強という時間を自分の思い通りに使える機会を与えていただけたおかげで、個人的には大いに満足のいく研究成果を挙げることができた。学院留学の制度と、今回快く留学に送り出してくださった学部・研究科の皆様に、改めて深い感謝を表したい。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間の大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。